

B 案 第19次調査計画案

(1)調査予定地点 第3次調査第2区を含む範囲(別添資料2-6・2-7)

(2)調査目的

①過去の調査区の位置・範囲確認

昭和40(1965)年に発掘された第3次調査第2区(第Ⅱ住居跡群)では、縄文時代中期加曽利 E 式期を中心に中期阿玉台式期から後期堀之内1式期の竪穴住居跡12軒等が検出されている。とくに阿玉台式期の第29号竪穴住居跡は、中部・西関東系の特徴を持つ住居構造で、床面上から4体の人骨が折り重なるように出土しており、加曽利貝塚で集落形成が始まる時期を知る上で重要な地点である。

当初報告(『加曽利北貝塚』1977 加曽利貝塚調査団)の平面図では、西側拡張部の記載が無く、位置が不明となっている土坑が存在することから、調査区の位置・範囲を確定する。

②遺構の確認

第18次調査地点では、当初、中期の遺構・貝層の形成過程の解明までを目指していたが、後期の遺物包含層・遺構群の調査までに留まった。北貝塚のなかで過去の調査において中期の遺構・貝層が確認されている本地点を対象とし、当初の目的の達成を目指す。

なお、この地点は阿玉台式期から加曽利E式期の竪穴住居跡が集中し、加曽利貝塚の中で最初に集落・貝層の形成が始まった地点の一つであることから、加曽利貝塚における中期大型集落・貝塚の形成開始期の実態の解明につなげたい。

③貝層の分布と時期の確認

昭和40(1965)年の調査では、当初報告(『加曽利北貝塚』1977 加曽利貝塚調査団)の記載から見る限り、加曽利 E I 式期から E II 式期にかけて形成された貝層、堀之内1式を中心に形成された貝層が存在していることが分かるものの、当時作成した土層断面図と報告書の記載に齟齬が認められることから、再検証を行う。

また、土層断面図から平坦な地形の上に貝層が形成されて堤状になっていることが分かるが、過去の調査成果では、堤状の盛り上がりは中期段階から始まっているのか、後期以降に始まるのか判断がつかないことから、今回の調査により解明を目指す。

(3)調査面積 約340㎡

(4)調査期間 令和9(2027)年度～令和11(2029)年度 3か年計画
各年度9月中旬～12月中旬予定